

公開シンポジウムの詳報

## 日本人の死生観のゆくえ

——人生儀礼はなお有効か？——

ニュースレター第31号でもお知らせしましたが、2002年3月16日に公開シンポジウム「日本人の死生観のゆくえ」を行います。皆様のお越しをお待ちしています。

日時：2002年3月16日（土）

13：00～17：00

場所：大正大学1号館2階大会議室

（東京都豊島区西巣鴨3-20-1）

都営三田線西巣鴨から徒歩3分。

JR埼京線板橋から徒歩10分。

### <プログラム>

主旨説明 島菌進（東京大学）

報告 菅原壽清（曹洞宗総合研究センター）

「伝統仏教と葬祭儀礼」

村上興匡（東京大学）

「葬祭の産業化と宗教性の変容」

関沢まゆみ（国立歴史民俗博物館）

「地域共同体と死生観」

樫尾直樹（慶応大学）

「既成教団をはみ出す宗教性や霊性」

コメンテーター 新谷尚紀

（国立歴史民俗博物館）

鷺見定信（大正大学）

司会 佐々木宏幹（駒沢大学）

孝本貢（明治大学）

### <主旨>

生死の節目に儀礼を行い、いのちの喜び悲しみをともに分かち合う時空を開くことは宗教の大事な役割です。初詣り、成人式、結婚式、還暦の祝い、葬式、法事といった催しから宗教色が抜けてしまったら、たぶんとても気持ちが落ち着かないことでしょう。しかし、他方、既存の宗教儀礼がたいへん味気なく、何の感興ももたらさずがっかりするように思

えることも少なくないようです。宗教的な人生儀礼からしっくりとする死生観が引き起こされず、気が晴れないのです。

日本では江戸時代以来、家族を中心とした人生儀礼のパターンが定まり、それらを通じて、日本的な死生観が広く受け入れられてきました。とくに葬祭や墓参りは死者の霊を慰め、死者を失った遺族や知己の心の痛みを癒す大事な機会でした。そしてそうした機会を通じて、「ご先祖」や「ほとけさま」や「みたま」の实在が実感され、死生についてのそれなりの納得も得られたのでした。その際、寺院と僧侶が果たした役割も小さくないものがありました。

しかし、社会構造が変わり、家族や共同体のあり方が昔日とはまったく異なるものとなりつつある今日の日本社会で、かつての人生儀礼がなお有効であるかどうか、疑問を抱く人も増えてきました。「伝統的」と考えられてきた儀礼になじみがなく、違和感をもつ人も増えているようです。その一方で先進国を中心に臨死体験が広く話題とされ、輪廻転生を信じる若者が増えているようでもあります。若い人のなかには「先祖になる」という考えよりも、「どこか違う世界に生まれ変わる」という考えの方が身近と感じる人も多数いるようです。

このような変化がもし事実であるとするれば、日本人の死生観に大きな変化が生じているということになるでしょう。また、死生観の大きな転換が起こっているとすると、伝統仏教の行う葬祭儀礼がしっくりしないものと感じられるのも、当然ということになるかもしれません。

このシンポジウムでは、以上のような問題について、これまで研究を積み重ねてこられたり、現場で見聞を広めてこられた方々にお話をいただき、資料を踏まえながら議論を進めていきたいと思えます。